学生逃げ歩き記（その2）

元防大銃剣道教官
兼坂　弘道　陸自55

異変が起こる

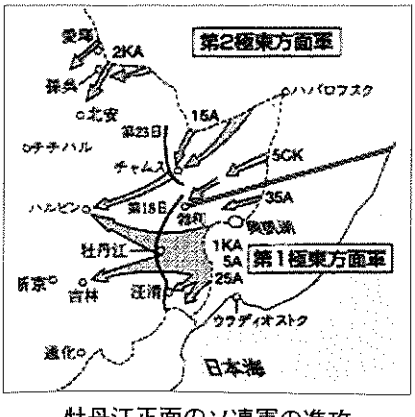
8月に入って新京に帰る日をあと何日と数えながら、重い足取りを引きずり麦刈りは続けられていた。小川先生は帰校のための打ち合わせで初旬に新京に出張された。7日であったと思うが、夜中にソ連領ポルタフカ付近で照明弾が激しく打ち上げられ、サーチライトも光ることが望見され、平素は暢気な学生たちだが「ロ助の演習か？」それとも「日本軍の越境か？」と喧々諤々の勝手な憶測で寝付くことができず、これは只ならぬことだと皆で騒いだが30分程度で治まった。これはソ連侵攻の前触れではないかと心配したが、関東軍は静謐を保っていたのは何たることだろう。後日知り得たところによれば、関東軍の高級幹部達はこの時期に南満洲の熊岳城（ゆうがくじょう）の温泉で図上演習を開いていたということを知り、現地の緊張感をどのように感じていたのだろう？　この時期に対応措置に入っていれば、私たちは無傷で新京に帰っていたかもしれないのに…。

9日の午前1時頃、上空で爆音がした。不寝番は、日本軍の飛行機の音と思い、誰にも知らせなかったというが、この時は牡丹江方面への爆撃の侵攻である。翌朝6時の点呼で庭に並んだときは、上空をソ連の爆撃機の編隊がソ連領に帰るのが見られた。私たちはその編隊を日本軍の攻撃機と見間違え、手を振って送ったが、これはソ連機が牡丹江方面を爆撃して帰る編隊であり、信じているときは赤い星も日の丸に見えるという滑稽極まる現象であった。

本当にソ連軍が侵攻し始めたことを感じ取ったのは、綏芬河（すいふんが）に砲弾の水柱が上がったり、南の郭亮船口山陣地での射撃音の激しいこと、南の勝関陣地地区の激しい射撃音が響き渡ってきたこと、団山子監視哨に火の手が上がり燃え上ってきた状況からである。

この事態になるとこれまでは傍観的に見ていた私たちも容易ならざる状況を感知して危機感に変わった。正に成す術を知らず、騒ぐばかりであった。斎藤教官に「付いて来い！」と言われ、200㍍先の畑作中隊本部まで急行した。伊藤隊長の机の上には小さなラジオが〝ピーピーガアガア〟鳴っているが、何を言っているのか分からない。教官が対応を尋ねたが、伊藤隊長の返事は「ソ連との戦闘が始まったようですが、間もなく関東軍が反撃するでしょうから、麦刈りの準備をして置いて下さい」と至極暢気な返事である。日頃は温厚な斎藤教官もこの時は顔面色を成して隊長に詰め寄り「何を仰るか！　私は120名の学生を親から預かってここに来ている。学生の命を預かっている者としてそんな暢気なことはできない。貴方方が何と言おうと今直ぐ新京に帰ります」と言い、私に向かって「お前は直ぐに帰る準備をさせなさい！」「小川隊にも伝えなさい！」と東寧駅へ向かう。

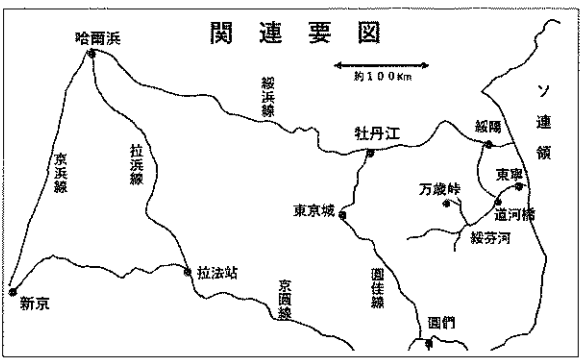
私は200㍍の道を脱兎のごとく走り帰って「全員新京に帰る準備に掛かれ！」と連呼した。教官も帰ってこられて、「小川隊にも指示して来い！」と言われたので、又500㍍走って小川隊に伝達しに行った。ここは小川教官が不在であったので、青柳君が纏めていたが、てんやわんやの騒ぎで青柳君も大変な苦労をした様である。私は帰って自分の荷物を纏め、中には以前に拾った作業シャツ・地下足袋のほか、珍しくも英語のコンサイス辞典も含めてリュックサックに詰めて帰る支度をした。方々に走り回ったので皆より支度が遅れ慌て焦った。このころになると、三角山の砲兵陣地から黒煙が上がり、綏芬河に落ちる砲弾の水柱も激しくなり、容易ならざる状況になったことが身に沁み、泣き出す者、強がりを言う者、黙々と帰校準備する者と種々雑多である。私の準備は最後のようで焦りに焦ったが何とか纏め、ぼろ隊舎から引き揚げ東綏の本部に向かったのは9時過ぎとなった。



牡丹江正面のソ連軍の進攻

途中、迫撃砲のシュルシュルという飛翔音やボカボカという爆裂音に脅かされながら、必死に黙々と然も急歩で正に命がけで歩いて農業本部に向かった。無駄口を利く者はなく、必死で歩いた。

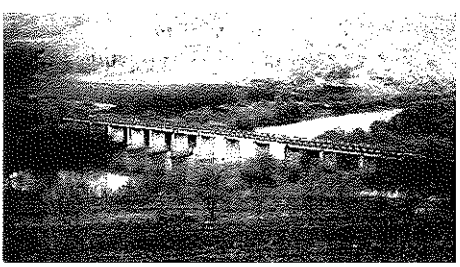
本部には小川隊が既に到着していた。青柳君が斎藤教官に全員無事に引き揚げてきたことを報告し、一安心した。親友の諸藤君は鎖骨を痛めたため義勇隊の医務室に入院していたので、彼のことが心配であったが、無事に農業本部に引き揚げ私たちに合流出来て安心した。「良かったなあ」「うん、良かった」とお互いに声を交わし班に戻った。農業長の考えは、農場の隊員は軍隊に協力して陣地地域に入るようだが、私たちに対しては新京に引き揚げることを認めたようで、米・塩・梅干等の支給を受けて東寧駅に向かうことになった。学生の間では汽車に乗れば直ぐ家に帰れるので携行の食糧はいらない。「早く駅に行こう！」と言って食糧を受け取らない者もいたが、私は凡て貰っていく方に賛成してリュックサックに詰め込んだので少々重かった。色々の意見が錯綜し、農業本部を発ったのは正午過ぎであり、斎藤教官から「我々は殿部隊だね、頑張って新京に帰ろう！」と激励されて東寧駅に向かった。途中、砲弾の飛翔音や爆裂音に戦き、溝や物陰に身を隠しながら引揚行進で駅に到着したのは夕方近くであった。駅は避難の人々で混雑を極めていたが、人々を運ぶ列車はなかった。そのような中、斎藤教官は係官との乗車交渉で大変なご苦労をされていた。県公署（県庁）との折衝もされたが、解決の望みはないらしく、次の駅の道河まで歩くことになった。



戦禍を逃れて

私たちが県公署の裏山に登りかけたその時に迫撃砲弾が県公署に炸裂した。正に九死に一生を得たが、その時私は最後尾を歩いており、着弾地から50メートルぐらいしか離れていなかったので肝を冷やしたものである。教官と我々班長達はとに角道河まで歩き、其処も駄目なら牡丹江まで250キロを歩くことにした。案内の地図もないしガイドもいなくて大丈夫かと皆不安気である。道端に着流しで下駄履きの女性たちが休んでいた。その中の一人が「学生さんは元気でいいね、もう私たちは歩けない、街に帰るわ」と言っていた。彼女たちは先に話した慰安所の人たちだったようであるが、その後どうなったのだろうか。

夜道の行進は眠気との戦いである。先生の発案で軍歌を歌いながら歩くことにした。「万朶の桜か襟の色花は吉野に嵐吹く　大和男子と生まれては　散兵線の花と散れ」と歌うが、2番になると歌う者は半分となり、さらにその先は殆ど歌われず、尻切れトンボの歌い方となり、いつの間にか黙々と歩を進めるだけの夜行進となった。眠りながら歩き躓いて転ぶ者、路肩でうずくまる者、マメが出来て痛がる者等で行進長径は伸びるばかりであった。諸藤君は肩が痛そうだが落伍させる訳にはいかない。蛇行する綏芬河の流れも私たちの行動には障害物となる。大喊廠鉄橋は真夜中の通過となり、全員四つん這いで恐る恐る渡った。下を見ると濁流がゴウゴウ音をたてて流れていた。踏み外したらあの世行きとなると思うと足の震えが止まらない。


道河橋

道河手前の山道に差し掛かったころには先頭と最後尾との距離が延びに延びた。教官は私を呼び「元気な者は先発隊として道河まで行け！後は教官が纏めて行く」と指示され

たので、私たち10名は先行することになった。10日の朝早くに道河橋に差し掛かったので、裸になって川に飛び込み嬉々として顔を洗い着替えもしていたところ、ラグー3型戦闘機の機銃掃射に会い、急いで橋の下に避難し、お互いが無事であったことを確認し安堵した。この時の機銃掃射は私たちではなく、近くの道路に並んだ輜重部隊を狙ったようだが、死傷者は出なかった。それにしても飛行士が見える程度まで低空飛行するソ連飛行機の憎たらしさには腹が立った。道河鎮の手前に救護所が出来ていて、避難者に握り飯を配っていた。多くの避難民が集まっており、私は思わず両手を出したら、運良く両手にお握りを載せてくれた。儲けたと思いそのまま口に入れた。皆がお前はずるいことをしたと羨んでいたが、本当に得をしたように思えた一コマであった。ここの係員に道順を聞くと、綏陽方向にはソ連軍が出て来て危険だから、左の方から万歳峠に逃げた方が安全だと知らされた。今までに聞いたこともない道順であるが、そう言えば2年前に在満の大学生が勤労奉仕で万歳峠方面に来て道路作業をしたと兄が話していたことを思い出した。枯れた柱に「新京工業大学作業記念」と書いた記念碑が建っていた。大喊廠では小学校に泊まることになったが、雨が降っていて学校は満員で寝られる状態ではなかった。私の前では女性が「子供が死にそうだ」と悲鳴を上げていた。運良く私と諸藤君は教壇の横に隙間を見つけて寝ることが出来た。翌朝早く歩き始めて少し行った道端に脇差風の日本刀が落ちていたので、これを拾い得意顔で歩いていたら、大人の人が血相を変えて迫り、「この野郎か！　人の刀を取ったのは」と言ってぶん殴られ、取り上げられた。私は道端にあったのを拾っただけだと言い訳したら、俺は用足しに草叢に入るために刀を置いたのだと言い返された。その人は機嫌を直してくれたが、殴られ損である。諸藤君には「無駄なものに手を出すからだ」と冷やかされた。少し歩いていくうちに短刀が落ちていたので性懲りもなく又拾って歩いたが、後でとんでもないことが起きた（ソ連兵に捕まった時の服装検査で短刀が見つかり、取り上げられ、全員厳しい服装検査をさせられた）。

大喊廠を出てかなりの距離を歩いていると、軍隊の幕舎があった。物資の補給点のようであり、通り過ぎようとしたら見習士官が出てきて「君たちは一中の生徒ではないか」と呼び止められた。「そうです」と答えたら、「俺は中学校のＯＢの大鳥居だが、どうしたのだ」と言われたので状況を説明したら、「弟も東寧に行ったと聞いたがどうしてる？」と言われ、「大鳥居君は後から来ます」と答えた。「それなら今日はここで泊っていけ」と言われたので泊めてもらった。天幕の中には食料品が一杯あった。砂糖、缶詰、その他いろいろあり、「好きなだけ持っていけ」と言われ、砂糖、米、缶詰等をもらってリュックサックに詰めた。その晩はこの幕舎でご馳走になり、泊めてもらって、翌朝また歩き始めたが、昨夜の暴食がたたったようで腹の具合がおかしく、下痢が始まった。歩く度に排便しそうになり、たまらず近くの民家の軒先で休ませてもらった。そこの人が親切な人で、いろいろと看病してくれ、2日ほど休ませてもらった。地獄に仏である。

お湯を沸かしてお尻を拭いてくれたり、寝かせてくれたことは、本当に感謝感謝である。2日ほどで治ったのでお礼を述べて歩き出したが、本当に有難かった。弱った体に鞭を打っての強行軍が続き、後馬廠に着き、建築中の学校に収容され旅の疲れを癒すことができたが、ここ後馬廠では土地の人が親切にしてくれ、馬鈴薯や豚肉を分けてくれた。久しぶりに飯盒でご飯を炊き、皆と分け合って豚肉の御馳走を食べることが出来た。翌朝出発しようとした時に、斎藤教官以下の本隊が疲労困憊の様子で到着した。先発の私たちは黙って出発しようかと考えたが、それも良くないと迷っていたら、本隊の田原君に見つかり、先行を取り止め、教官に挨拶して本隊に合流した。教官も相当お疲れの様子であった。教官から労いの言葉をいただいたが、むしろ私たちが教官を労わりたいぐらいであった。皆で朝食をとり、次の目標である東京城（とんきんじょう）に向かうことになった。皆の疲労度は極限となっているようだ。皆の中では元気な部類である我々が先頭になって歩いたが、道を間違い、東京城ではなく一つ北寄りの石頭鎮（せきとうちん）に出てしまい、駅の構内で休むこととなった。其処には兵隊が多く集まっていて、東京城

に後退する準備をしていた。

終戦を知る

日付がはっきりしないが、18日か19日ごろの筈である。ここで初めて8月15日に終戦の詔勅のあったことを知り、愕然とした。これからどうなるのだろうか。私たちはどうなるのか。新京に帰ることが出来るのだろうか。斎藤教官も困惑されたことであろう。私は集合している兵隊さんのところに行き、どうなっているのか聞いて回った。下士官の人が「坊主、日本は負けたのだ。この手榴弾一つ川に投げてみろ」と言うので、止栓を抜き点火して川に投げてみた。川の水が浮き上がるような、大きな爆発力に驚いた。この部隊は東京城に下がるのだそうだ。駅のホームに帰ってみると、教官も帰っておられた。駅の事務所で、少しお酒を飲まれた様子である。学生の誰かが演歌を歌っていたのを戒めて、「何という不謹慎なことだ。これから君たちが頑張らなければいけない時に、だらしのないのは残念だ」と涙を流して諌められた。この日は駅のホームで仮眠し、明日東京城に下ることとなった。

私たちは総勢120名の学生の団体であり、十人十色でいろいろな意見があると思うが、纏まる時には纏まって行動しなくてはいけない。しかしそのルールを乱す者がいた。やるべきことに一々文句を言ったり、弱い者いじめをしたり、不愉快な行動をとる者も数名いた。その者たちの処置に苦慮したのは引率された教官や学生のリーダーたちである。所謂不良グループは、益々陰に回って気の弱い者をいじめるのは困ったことだ。帰国後、彼らとは交流もなく同窓会にも姿を見せていない哀れな結末となった。世に不良グループの種は尽きないのかも知れない。

逃げ歩きは続く

翌朝（8月20日だと思う）3時頃、叩き起こされた。「ソ連兵が迫っているので、直ぐに東京城に下がれ！」と指示されたのである。全員慌てて線路伝いに東京城に向かった。途中に破壊されたトンネルがあった。瓦礫の中を潜り線路の枕木を踏みながら急ぎ足で歩くのだが、枕木の幅が不規則なため歩きにくくて閉口した。

東京城駅にはまだ軍隊が残っていて、教官が交渉されて近くの陸軍官舎に分宿することになったが、軍隊はまもなく撤退する様子であった。終戦という言葉を聞き、それが敗戦なのか、単なる休戦なのか良く分からない状況で、私たちは親元に帰れるのか、帰れないのか、不安は募るばかりである。駅の倉庫には食糧やいろいろな物資が残されていたので、皆が漁るように取って帰り、官舎で自炊を始めた。官舎には畳は敷かれていたが、家財道具類は荒れ放題で、急いで避難した様子が伺える。台所の鍋やお釜はそのまま残されていたので、私はその家の台所にある鍋を使って倉庫から貰ってきた小豆でぜんざいを作ることにした。なかなか煮えないのでやきもきしていたら諸藤君が血相変えて駆け込んで来た。「ロ助の兵隊が来たぞ！」と言うではないか。一瞬緊張感が走り、今まで賑やかに食事準備をしていたのが驚きと恐怖に変わり、「どんな恰好だった」と聞くばかりである。諸藤君は「小さい箱みたいな車（ジープ）に乗って日本兵とペラペラ喋っていた」と言う。半ば恐ろしさと好奇心とが混ぜ合わさった気持ちで私たち2～3名は偵察に出かけた。

身を隠しつつ軒下伝いに駅前まで行ってみると、いるのはソ連兵である。薄汚れた軍服で革の長靴を履き、庇のない略帽子を被って大声で、身振り手振りを派手に日本軍の将校に話しかけていた。周辺にはジープに乗ったソ連兵が自動小銃を構え、時々空に向かって「ババン」と威嚇射撃をしている。民間人の服装をした人間も加わり、居丈高に喋っており、どうも中国系か朝鮮系のようだ。日本の将校に対し、偉そうな態度をしているのを見るのは残念な光景であった。日本兵も悔しいだろうな！と思った。私は軍人の子供であるからたまらなく悔しかった。日本軍人は「生きて虜囚の辱めを受けず」の言葉を父からよく聞かされていたからである。間もなく日本兵が現れ、武装解除が始められた。悔しそうに小銃を投げ棄てる姿も見られ、私も悔しい気持ちになった。日本軍はソ連軍に負けたのだ。父はどうなっただろうか。新京の母、妹はどうなっただろうか。俺たちはどうなるのかと、走馬灯のごとくに走り廻ったものである。頼りにしていた関東軍がこのざまでは先行き心配どころか、死にたくなるような気分で官舎地区に帰り、教官に報告したが、斎藤教

官も沈痛の様子でなす術がなく、困った様子であった。

ぜんざいでも食べようかと支度をしていたら、官舎地区は危険なので地元の守備隊の施設に集まることとなり、せっかく作ったぜんざいを飯盒に移して守備隊の倉庫に移動した。現地人が暴徒化して日本人を襲うとの情報が流れたからである。東京城の街内では、日本の敗戦状況を知り始めた現地人がボチボチ不穏な動きを始めたからであろう。ソ満国境全体として北朝鮮系の人口比率が高かったため、騒動を起こす比率も多かったのかもしれない。守備隊の倉庫には開拓団等からの避難民が大勢収容されていた。皆不安な様子で静まり返っていた。翌朝は方々でデモらしき騒ぎが起こり、守備隊の営門で警備に当たっていた無装備で丸腰の兵隊が暴民に撲殺される事件が起きた。斎藤教官に「お前は状況を見て来い」と言われたので、営門まで見に行った。大変な人だかりで、倒れた兵隊を見ていた。以後は武装解除の対象外になっている木銃（もくじゅう）を持って営門警備をすることになり、暴民は襲って来なくなった模様である。武装解除とは大変なことだと知らされた一齣であった。

暫くしてソ連のT34型戦車が主体となり、地響きを立てながら通過していった。電柱でも積んだのかと思わせるような大きな大砲を積んだ戦車は見たことがなかったので、ただただ唖然として見守るだけである。戦車には大勢の兵隊が跨乗していて声高らかに歌を唄いながら通過していく。女性の兵士も混じっていた。日本では見られない光景で、茫然と見ているだけである。中にはノモンハン事件当時のBT戦車もあった。キャタピラがバラけて立ち往生し、その修理を急ぐ場面もあり、私たちは驚いたり笑ったりして見ていた。トラックはGMC（GM社の軽トラック）で米国からの援助車両であることがハッキリと判る。歩兵らしき徒歩部隊も続々と歩いてきた。服装は埃だらけでだらしがない。帽子は庇のない略帽子か鍋のような鉄帽で、自動小銃の銃口を下にしてマンドリン式に担ぎ、毛布のような布をタスキ掛にし、小さなナップザックを背負って道路一杯に広がって歩き、そのだらしなさに、こんな兵隊に負けたのかと悔しさが募った。将校らしい者は革の長靴であるが、兵士は短いゲートルを足首に巻きドタ靴である。部隊は町はずれに天幕を張り宿営していた様子である。

日本兵の一部にはこれから山に入って抵抗するのだと、隊から分かれる一群もあった。ある軍曹さんは私のぼろ靴を見て、「これは大変だろう。これを履け」と言って新品の軍靴を呉れた。皆に羨ましがられたが、その後ソ連兵に取り上げられたので、リュックサックに入れていた地下足袋を履く羽目になった。日本の地下足袋は親指が分かれているが、満洲の足袋は分かれていないので「満足袋（まんたび）」と呼んでいた。悔しい出来事である。

（つづく）

広告目次

㈱セレモア……表紙3
㈱東京都民互助会……表紙3
ローレルバンクマシン㈱…表紙4
㈱和泉家石材店……11
メモリアルアートの大野屋……23
信和株式会社……28
㈱武蔵富装……30

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。